

日本語・日本語教育部会

【概要】

竹村 明日香*・山口 紀子**

日本語・日本語教育部会は12月15日（火）午後12時30分から16時00分まで文教育学部1号館大会議室にて行われた。

本部会においては、前半は大学院生3名、後半は大学教員3名による研究発表が行われた。以下、それぞれの発表内容をまとめ、報告する。

1. 河野礼実（お茶の水女子大学大学院生）

「“おネエ”キャラクターの人称—バラエティ番組とフィクション作品を材料に—

河野さんのご発表では、“おネエ”と呼ばれる生物学的には男性だ（った）が、装い、言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人が用いる自称と対称についての調査報告があった。これらの語を①TVのバラエティ番組と②漫画等のフィクション作品で検討したところ、自称の場合、②では「あたし」等の女性専用形式が頻用されるのに対し、①ではそれらの他に男性専用形式の「ぼく」等も使用する例が見られた。対称においては、②では全員が「あんた」という対称を使っていたのに対し、①では半数しか使用しないという対照的な結果が得られた。以上を総合すると、自称・他称共に①は②よりもバリエーションが豊富ということになる。またこの結果からフィクション作品の作り手（及び受け手）には“おネエ”キャラの人称に共通したイメージ、即ちステレオタイプが存在しているという指摘もなされた。（竹村）

*お茶の水女子大学基幹研究院助教

**お茶の水女子大学大学院生

2. 張良光（高麗大学大学院生）

「初対面雑談における連鎖構造分析の一考察—共有からはじまる連鎖組織を中心に—

張さんは、自由な会話というイメージの強い「雑談」が、実際には様々な規範や規則を持っていることを、日本人母語話者同士の初対面雑談の分析により指摘した。分析の枠組みとして①「相手が知っているはずの情報」の「想起要求」と、②「共有意見提示」に注目したところ、①では「想起要求—回答」の隣接ペアが多く見られ、「～っけ」「～た？」という記憶確認、「～ませんか」という経験確認の言語形式が多用されていた。②では「共有意見提示—同意表明」のペアが多く、不同意表明の場合でも意見対立は見られなかった。以上のように、初対面雑談では、共有経験や知識を重ねることで親しさを増し、二人の意見を一つの「共有物」として人間関係を構築している様子が報告された。これにより、雑談は単に自由な会話とは言えず、課題遂行の目的を持っているということが指摘された。（山口）

3. 外間郁江（国立台湾大学大学院生）

「台湾における年少者日本語学習者の第二言語習得—台湾の二つの日本語教育施設における幼児の日本語による対話・応答に関する考察—

外間さんの研究は、近年台湾で増えつつある幼児の日本語教育に焦点を当て、2つのバイリンガル教育施設の3歳児クラスを対象として、学習環

境及び授業中の発話行動を観察したものである。調査の結果、2つの教育機関にはコースデザインやシラバスに違いが多くみられたものの、教授スタイルには共通のものが観察され、いずれも目標言語を使用して授業が実施され、遊びや歌や絵本の読み聞かせといった子供を飽きさせない工夫が盛り込まれていたことが観察された。また、授業中の幼児の発話を分析した結果、模倣・質問に対する自発的応答・質問の順に対話機能が多くみられた点が2つの機関に共通していた。どちらの機関でも、幼児たちは授業中のインターアクションに積極的であり、既に学んだ日本語を用い、母語話者の自然発話に近い言葉でコミュニケーションが図れていることが報告された。(山口)

4. 白以然 (高麗大学校)

「L1とL2の意味の違いと学習者の認識」

白先生は、日本語の複合動詞「～出す」と韓国語の対応語である「～내다」の意味の差について、認知意味論のイメージスキーマを用いて解説され、両語の意味の違いが韓国語をL1とする学習者の認識に与える影響について発表された。両語とも基本義は「外への移動」であり、それが時間のアスペクトに拡張する共通性をもつが、「～出す」が開始を表わすのに対し、「～내다」は完遂を表わす点で異なっている。この差は日本語が「移動」を外部からの視点で眺め、韓国語は内部からの視点で眺めることによって生じると説明された。また、日本語学習に与える影響について、日本語・韓国語・中国語母語話者に対する「～出す」の文判断テストを行った結果、韓国語母語話者は「完遂」用法の受容が有意に高く、レベルが上がるにつれ日本語母語話者の判断に近づくものの、対照群と差が見られ、L1の影響が指摘された。(山口)

5. 金杉ペトラ (カレル大学)

「連体修飾と複合語のスケール—チェコ語と日本語の対照—」

金杉先生のご発表では、チェコ語と日本語の連体修飾を形態論と認知文法の観点から分析した発表が行われた。具体的には、チェコ語の「形容詞＋名詞」という連体修飾名詞句が、日本語の名詞句・複合語・派生語・単純語のいずれに相当するかという対照研究の成果が報告された。その結果、チェコ語の「自由連体修飾語」は日本語の名詞句に相当し、「厳密連体修飾語」は日本語の複合語・派生語に相当するという指摘がなされた。「自由連体修飾語」は形容詞と名詞の間の緊密性がゆるい修飾であり、日本語では名詞句がこれに相当する。一方「厳密連体修飾語」は、二語の緊密性が強く、程度副詞を受けないなどの諸特徴から、複合語・派生語がこれに相当するとの指摘があった。また最後に、複合語化には文化の価値観の差が反映されている可能性があることを、「権利」を表す語の例で以て提示された。(竹村)

6. 佐野香織 (お茶の水女子大学修了生、早稲田大学)

「『越境』の概念から考える活動と学び再考—『異端』の学びの展開はあるのか—」

佐野先生のご発表では、日本語学習の場を、「様々なことにそれぞれが興味をもちつつ『学び』を求めて来た異質、異文化を持つ他者の集まりの場」と捉え、「異質な文化に触れあうことで熟達や既存の枠組みの破壊が起こり、そこから新しい振る舞いやコミュニティが再構築される」とする「越境」の概念を用いての協同実践分析が報告された。実践として、ポーランド国立大学日本語作文クラスでのEメール作成の課題において、従来の教師添削型の指導の代わりにWebベース作文支援システム(CMC)を用い、書き手と読み手のコメント機能を利用した学習者間のインターア

クシオンを通じた学びを試みたところ、読み手のコメントはほとんどが語・形式の添削に留まったが、書き手のコメントには読み手とのやり取りを通じた主体的な取り組みが多く見られ、越境による「知の共同創造」の様子が観察されたとの報告がなされた。(山口)

以上、日本語・日本語教育学部会における3名の先生方、及び3名の大学院生による異文化研究と日本学をテーマとした研究発表についてまとめた。異なる背景を持った人たちが集まり、研究を通して交流が行われた非常に有意義な会であった。今後も分野、機関、国を超えた交流が期待される。